

「人びと」とは誰か ——『人びとのなかの冷戦世界』を読む——

Who are the “People”?: Reading *Hitobito no naka no Reisen Sekai: Sōzō ga Genjitsu ni naru toki* [The Cold War World among Ordinary People: When Imagination Became Reality] (Iwanami Shoten, 2021)

渡辺 直紀
WATANABE Naoki

武蔵大学人文学部
Musashi University, Faculty of Humanities

キーワード
冷戦 世論 朝鮮戦争

Keywords
The Cold War; Public opinion; The Korean War

Quadrante, No.24 (2022), pp.151–155.

1. 本書、益田肇『人びとのなかの冷戦世界——想像が現実になるとき』(岩波書店、2021)は、1950年6月25日に北朝鮮の南侵で始まった朝鮮戦争において、国際関係、特にこの戦争に参戦したアメリカと中国が、どのように意思決定・政策決定を行ったかを考察している。外交史の分野でこの種の研究は、これまで、それぞれの政権の中核にいた政治家や官僚たちが引退後に書いた回顧録などを紐解きながら、歴史のターニングポイントとなった意思決定の過程が説明されることが多い。しかし、本書は、そのような権力の中核にいた人たちの意思決定が、それぞれの国内世論を周到に参照したうえで行われていたことを、アメリカや中国の当時の関連資料を用いて解明している。

もともと本書は、著者が米・コーネル大学の博士論文として2012年に提出したものをもと

に、アメリカで刊行した著書、Masuda Hajimu, *Cold War Crucible: The Korean Conflict and the Postwar World*, Harvard U.P., 2015と内容をほぼ同じくしている。この英文版の書名にある「るつぼ」(crucible)という言葉は、邦訳のタイトルには採用されていないが、本書の性格をととてもよく表している。つまり、参戦国の意思決定・政策決定は、単にそれぞれの国家の権力中核にある一握りの政治家や官僚、外交官らの思惑以外にも、特に、その参戦を後押ししたり忌避したりしようとする、広範な世論もその決定因として織り込んだ、複雑なものとしてあったということである。そのような視角が注目され、英文版に対する書評でも本書は「朝鮮戦争をグローバル社会史としてみた最初の本」(C. K. Armstrong)、「朝鮮戦争の外交史と社会史をあわせた最初の本」(J. F. Person)などと評価された¹。

¹ Charles K. Armstrong, *Canadian Journal of History* 51.1 (Jan. 2016) U. of Toronto Press; James F. Person, *The Journal of Asian Studies*, 75.2 (Feb. 2016), Cambridge U.P. など参照。



邦訳の帯にはO・A・ウェスタッド氏の推薦辞が掲載されている。ウェスタッド氏は『冷戦——ワールドヒストリー』（原著2017、益田実監訳、岩波書店、2020）でも知られるが、今回の本の著者である益田氏もこれに対する書評を寄せている（*American Historical Review*, June 2019）。資本主義／社会主義と世界を二分した冷戦は国家や人々の生活を翻弄した。その起源から終焉までの100年の歴史を米ソ、欧州、アジア、アフリカ、ラテンアメリカなど、全世界を包摂した「ワールドヒストリー」として叙述したウェスタッド氏の著書は、序章・終章を入れて全24章の大著だが、各章の叙述は、朝鮮戦争、ベトナム戦争、キューバ危機、デタントなど、おなじみのテーマである。益田氏の今回の著書は、そのうち、朝鮮戦争が勃発した1950年の前後数年に集中して微視的に分析したものとも言えるだろう。

2.

著者の益田氏はそこで、冷戦の政治過程が、単に政治指導者の考えやイデオロギーによって進められたのではなく、それぞれの国の市民の意見や世論が、むしろ政府の方針よりも過激な場合もあったと考え、それらの分析を、既存の研究の批判的な検討を通じて検証する。特にアメリカや日本、イギリス、カナダ、オーストラリア、中国、香港、台湾、シンガポールなど世界各国の、大学図書館や各種博物館・記念館、公文書館で調査しながら、基本文献はもちろんのこと、さまざまなレベルの世論を調べるために、各種新聞の社説や投書、また政府・政党に寄せられた手紙、志願書などを丹念にあたっている。

「第I部・連鎖する世界」では、第二次大戦後、初期の米・日・中の社会・政治連関や（第1章）、1950年6月～7月の時期を中心に、朝鮮戦争が勃発することで、第三次大戦勃発の恐怖を

いかに世界に与えたかに言及される（第2章）。また「第II部・社会的なものの時代」では、朝鮮戦争に対する人々の受け止め方と政府の政策との関連性について、アメリカの場合（第3・第5章）と中国の場合（第4章・第6章）が検討される。両国の政府はともに参戦に慎重で、国民の方が積極的だったが（各種投書や手紙での意見表明）、それがいかなる契機で参戦に進んでいったか、南侵した北朝鮮軍を押し戻し、38度線を元に戻した国連軍（米軍）が、さらに北上するためにアメリカ国内でどのような議論が交わされたかについての議論もとても興味深い。また一方で、中国においても、北侵してきた、国連軍（米軍）を南に押し戻し、さらに38度線を南下するとき国内で交わされた議論や、人民世論の突き上げなどが紹介・分析された部分などは、本書が初めて明らかにした部分の1つと言ってもいいだろう。

さらに「第III部・同時性の世界」では、冷戦初期の反共主義的・抑圧的な運動のあらたな解釈が示される。アメリカのマッカーシズム（第7章）、イギリスの労働運動弾圧や日本のレッドパージ（第8章）、中国の鎮圧反革命運動（第9章）、台湾の「白色恐怖」（白色テロ）やフィリピンの「非フィリピン活動」を、冷戦的な視点よりも、各国の社会変動や歴史的経緯から説明する。特にアメリカやイギリスでは、第二次大戦に動員された黒人や女性たちが、大戦終了後に出征した白人男性が社会に戻ってくことで、また元の社会的位置に戻されることに抗議した（意見提示・ストライキなど）ものの、それに対して、軍から復員した男性たち中心の世論は、古きよき伝統社会を渴望し変化を拒むために、「冷戦的」道具——「アカ」のレッテルを相手につけたりしたという指摘も、レッドパージの新たな説明としてきわめて興味深い。つまり、それらの言説は、必ずしも冷戦・反共主義の議論の中心から出てきた態度ではなく、人種や性差

による社会変動とその揺れ戻しであった、というのが著者の見解である。また、台湾やフィリピンの場合も、第二次大戦後の社会変動は脱植民地化を意味したが、実際には新たな宗主国によって再植民地化される過程だった。その葛藤が冷戦的・反共主義的な衣装をまとっただけである、というのが筆者の益田氏の指摘である。

3.

本書における益田氏の議論は、その分析対象を、参戦国の政策決定内部での一部の権力者や政治家、官僚らのやりとりだけでなく、それにさまざまな影響を及ぼした世論の動向を丹念に調べ上げたうえで、それをさまざまな意思決定の要因としている点が特徴的である。そこにちりばめられているさまざまな資料やエピソードに接することで、読者たちはこれまでのこの分野での議論を振り返りながら、議論の更新のためにさまざまな知識を反芻することになる。

かく言う私も、韓国・朝鮮の文学や文化を学んできた人間として、本書を通じて、実にいろいろなことを考えさせられた。たとえば、本書の第1章で、第二次大戦後、国共内戦時に米軍が中国の都市部に駐屯して蒋介石を支持していたが、米軍の駐留やその国民党支援に対して批判していたのは、共産党ではなく、国民党系の新聞や市民・若者であり、それだけ、共産党の力に希望を託すよりも、国民党に対する信頼と絶望が大きかったことが指摘されている点である。このあと、国民党と蒋介石は台湾に逃れ、本書でも「中国」に関する記述は毛沢東・共産党政権下のことになる。実は、この国民党・蔣

介石の敗北は、東アジアの国際関係や朝鮮半島情勢にも大きな影を落とした。

第二次大戦中、朝鮮の独立運動は中国大陸でも展開され、運動の根拠地となった重慶(国民党)や延安(共産党)にも多くの朝鮮人の独立運動家たちが身を寄せることになった。延安にいた人士としては、ニム・ウェールズ『アリランの歌』(1941、邦訳あり)の主人公・金山(張志楽)や、短篇「光の中に」(1939)など日本語で小説を書き、当時、日本内外で著名だった作家の金史良などが、重慶の人士では、上海を脱出して国民党と行動をともにした、金九ほか大韓民国臨時政府の要人などが、それぞれ有名である。重慶で、アメリカのOSS(海外戦略処)が臨時政府の韓人青年部隊を訓練して、米軍が(植民地)朝鮮へと侵攻する時に従軍させる予定だったなどということも、現在、韓国史の分野では周知の事実である²。

だが、というか、それゆえに、というか、8月15日の日本敗戦の報を聞いて、重慶にいた金九が「嬉しいニュースというよりは、天が崩れるような感じ」(金九『白凡逸志』邦訳あり)と言って懸念したのは、大戦の戦局に臨時政府軍が参戦できず、日本敗戦後の国際政局でのヘゲモニー掌握が困難であろうことを悟ったことを意味する。その後、延安にいた朝鮮人たちは平壤に、重慶にいた朝鮮人たちは、アメリカの指示で、臨時政府としてでなく個人の資格でソウルに戻る。平壤の延安派は後に粛清され(金史良は朝鮮戦争従軍中に行方不明になった)、臨時政府系列でも、アメリカから戻った李承晩(臨時政府初代首班)は韓国の初代大統領になるが、重慶から戻った金九は朝鮮戦争前に暗殺される³。1950年6月の朝鮮戦争勃発前に、

² 鄭靖和(姜信子・訳)『長江日記—ある女性独立運動家の回想録』(大韓民国臨時政府の記憶1)(明石書店、2020)234頁。本書は、金滋東(宋連玉・訳)『永遠なる臨時政府の少年—解放後の混乱と民主化の闘い』(大韓民国臨時政府の記憶2)(明石書店、2020)とともに、大韓民国臨時政府の動向をみるうえできわめて興味深い記述が多い。

³ 解放後の朝鮮半島における政局の動きについては、益田氏が本書で言及している、金聖七(李男徳・館野哲・訳)『ソウルの人民軍—朝鮮戦争下に生きた歴史学者の日記』(社会評論社、1996)以外にも、鄭敬謨(鄭剛憲・訳)『歴史の不寝番—「亡命」韓国人の回想録』(藤原書店、2011)なども日本語で読めるし、また、邦訳刊行が予定されている藤井たけし『ファ

「人びと」とは誰か

臨時政府系の人士が期待を寄せた国民党と蒋介石は台湾に逃れ、1949年10月に中華人民共和国が成立して、建国後のせわしい時期に、翌年から隣国で起こった朝鮮戦争に、北朝鮮支援のために人民義勇軍を派遣することになった。国民党・蒋介石の失墜がすべてを決めたわけではないが、当時の東アジアの国際政局を「るつぼ」化させた大きな一因には違はなく、そのような激動の東アジア史の推移が、益田氏の本書での分析からもよくわかった。

また、アメリカでも中国でも政府は朝鮮戦争への参戦、および参戦後の戦争遂行にとっても慎重だったが(38度線をあらためて越えるかなど)、それぞれの国内政治の都合上、あるいは世論の突き上げもあって決行するに至る政治過程に対する分析や(第3・4章)、戦局が変わると世論も変わり、さまざまな嘆願書や志願書などを新聞に投書したり(アメリカ)、党に送付したり(中国)する市民が出てきて、それにまた政府が突き動かされる過程の分析など(第5・6章)もとても興味深かった。たとえば、毛沢東が息子(長男)の岸英を朝鮮戦争に従軍させて死なせてしまったこと(彭徳懐のロシア語通訳として従軍中、米軍のナパーム弾爆撃で戦死)など、後に伝説となるような事実もあるが、一方で戦局を大きく動かしていたのは、それぞれの国の市民・国民・人民であったりもしたのである。

4.

ただ、本書の分析にいくつか疑問がなかったわけではない。朝鮮戦争時のアメリカや中国の世論形成と政府の政策決定については、本書の内容であらかた理解することができた。では、冷戦期の他の時期・地域でも同様のことが

言えるだろうか。C. Armstrongなども指摘しているように⁴、アメリカをはじめとする「西側」を反共主義が席捲したとき、「東側」、特に中国以外のソ連や東欧圏はどうだったと言えるか。アメリカや中国と同様に世論が政府を突き上げるような現象は見られたのか、あるいは他の異なる様相を呈していたのか、気になるころではあった。もちろん、益田氏の本書はこれだけでもかなり浩瀚で、すべてを盛り込むことはかなり困難を伴ったかと思うが、特に、朝鮮戦争で陰に陽に微妙な影響を及ぼしたソ連については、何らかの分析を加えてほしかったところである。

また、これも英文版の書評でT. Henryなどが指摘していることだが⁵、新聞の社説、普通の「人びと」の投書や手紙の読み方についても気にはなる。内容を読めば、アメリカでも中国でも政府のあいまいな姿勢を正す主戦派の主張が多いが、表面的にはそのように受け取れるそのような主張も、もう少しいろいろな文脈で読み取ることはできなかったか。また、これらの社説・投書・手紙がそのまま政府を突き動かしたとみるのはやや短絡ではないか、そこを線で結ぶには、もう少し明確な根拠づけが必要ではなかったかと思うのである。そうでないと、慎重な政府と対照的な態度をとる社説・投書・手紙を、筆者が本書の資料として意図的に配置したとみられてしまう可能性もある。また、そもそもこのように主張する人たちは、本当に、普通の「人びと」と言えるだろうか。これらの資料のエビデンスとしての価値についてどう判断すべきかについては、もう少し慎重な判断が必要ではなかったかと考える。

朝鮮戦争の過程や推移を国際関係との関連においてのみ見るのは、本書の場合、それとし

シズムと第三世界主義のあいだで——朝鮮民族青年団の形成と没落を通してみた解放8年史』(歴史批評社(韓国)、2012)にも詳しい。

⁴ Charles K. Armstrong, *ibid.*

⁵ Todd A. Henry, *Pacific Historical Review*, 85.3 (Aug. 2016), U. of California Press.

て意味があるだろう。しかし、また、これも英文版の書評者たち（主として韓国政治や韓国史の研究者が多かったようである）もみな指摘しているように、益田氏が本書で行ったのと同じ作業を、朝鮮半島で直接戦争を体験した人たちについて調査したらどうなるだろうか。そこで普通の「人びと」はどのような声を出していたのか。最近、韓国のみならず、日本やアメリカなどでも朝鮮戦争に対して、かならずしも社会史的にということだけでなく、さまざまな資料を用いて従来とは異なる視角から、朝鮮戦争時の南北朝鮮の社会に接近した研究が数多く出されている⁶。このような成果を踏まえて、益田氏の主張する普通の「人びと」の世論形成を、朝鮮半島内での出来事で把握できるならば、本書の主張はさらにリアリティを増すだろう。

⁶ 金孝淳『私は日本軍・人民軍・国軍だった——シベリア抑留者、日帝と分断と冷戦に踏み躪られた人びと』（西海文集、2009）；イ・イムハ『敵をビラで埋めろ——韓国戦争期アメリカの心理戦』（チョルスとヨンヒ出版社、2012）；Monica Kim, *The Interrogation Rooms of the Korean War: The Untold History*, Princeton University Press, 2019；藤原和樹『朝鮮戦争を戦った日本人』（NHK出版、2020）；キム・ジェウン『告白する人々——自叙伝と履歴書からみた北朝鮮の解放と革命1945-1950』（プルンヨクサ、2020）；カン・ソンヒョン『小さな「韓国戦争」たち——平和のためのビジュアル・ヒストリー』（プルンヨクサ、2021）など。